



JACET通信

大学英語教育学会

November 2004 The Japan Association of College English Teachers

No.146

【第43回全国大会特集号】

大会をふりかえる

大会委員長 田中春美

さる9月3日(金)から5日(日)までの3日間、第43回 JACET 全国大会が名古屋市昭和区の中京大学で開催されました。『「国際語」としての英語——その教育目標と基準——』という大会テーマにふさわしく、本大会の主な講演者は、マレーシア・インド・英国・カナダから招かれ、提携学会からの代表も加えると、韓国・シンガポールも含められます。したがって、各種講演やシンポジウムでは、英国・カナダの母語英語だけでなく、アジア諸国の第2言語・外国語の英語も飛びかい、文字どりの World Englishes によるコミュニケーションの場となりました。

すでに亡くなられた直井豊先生や佐藤一夫先生のご指導のもと、1983年に発足した中部支部は、第24回(1985年、椋山女学園大学)と第33回(1994年、愛知淑徳短期大学)に全国大会の開催をお手伝いし、今回が3回目になります。昨年の2日間から再度3日間に戻り、基調講演3、特別招待講演2、招待講演9、シンポジウム16などをはじめ、数え切れないほどの研究発表や実践報告が行われ、延べ800名を超える参加者でにぎわいました。特記すべきは、「私の授業」が復活したことと、学内での懇親会で JACET 賞の授賞式が行われ、さらに、プロのオペラ歌手の実演があったことでしょう。

同時進行の発表や報告が多すぎて聞きたくても聞けない、ハンドアウトが足りない、会場が分かりにくい、など苦情も聞かれましたが、まあ全体的にはスムーズに進行したのではないかと考えております(甘いでしょうか?)。内容的には、特別報告での諸外国の初等・中等教育における外国語(英語)教育課程の現状報告を筆頭に、各種講演や研究発表の中にも、大会テーマの EIL

(English as an International Language)にふさわしい研究や報告が数多く見られました。各講演・シンポジウムなどの詳細については、以下の各報告をご参照ください。



田中春美大会委員長

さい。私個人の印象ですが、韓国の提携学会代表の若いお2人の英語はすばらしく、同じ EFL の隣国に負けないよう、私たちもいっそう努力しなければいけないと感じました。

それもこれも、小林大会担当理事・芝垣運営委員長・吉川実行委員長をはじめ、本部の運営委員と支部の実行委員の諸先生方、本部事務局の方々、特に開催校中京大学の先生方とアルバイトの学生諸君のご援助とご尽力、そして田辺会長・森住副会長をはじめ、会期中重要な役割をこなしてくださった他の役員の先生方と、各セッションに参加して熱心に耳を傾け討議を盛り上げてくださった会員の皆様のご協力に、心から感謝申し上げます。中でも吉川実行委員長は、数日前から大学に泊まりこみ、大会の運営のすみずみまで詳細で周到な準備をなさっておられ、その献身的なご努力にはただ頭が下がる思いです。無力な私がかんとか大会委員長の重責を果たせたのも、すべて皆様のご指導・ご支援のおかげです。

大会報告

芝垣 茂 (全国大会運営委員長)

第43回大学英语教育学会全国大会は、2004年9月3日(金)・4日(土)・5日(日)の三日間、愛知県名古屋市の中京大学名古屋キャンパスで開催された。大会テーマは『「国際語」としての英語—その教育目標と基準—』であった。今夏は昨夏の冷夏とは異なり、早くから猛暑が到来、9月に入っても残暑厳しいなか大会開催中は820名以上の参加者を得て盛会となった。

今大会のテーマであった「国際語」としての英語は、確かに主旨の中で述べられているように「国際語」として呼ばれるようになって久しいが、その意味するところに関しては英語使用者の受け止め方や認識が多様である。ましてや、「英語が使える日本人」の育成にあたっては、「国際語」としての英語の現状と役割を認識しなければならないが、この大会の研究発表や報告などを通して、少しでも国際英語を駆使できる英語力を育てる教育目標と基準が提示された故に、暗澹とした思いが晴れ、拳措を失わずに済んだのではないか。

大学教育の果たすべき役割は、たんに学生個人にとってではなく、全人類にとっても、その将来を大きく左右する極めて重要なものである。それにもかかわらず、現代の学生の意識と大学教育のカリキュラムは、果たしてこういう期待に添うようなものとなっているであろうか。国際的感覚とか国際的視野ということが流行語のようにになっているが、今、我々は、国際社会のしたたかさを、毎日、毎時間、毎瞬いたいほどに感じさせられる国際関係の中におかれているのである。このような状況において、大学教育は対処することが充分できるまでに、我々の態勢づくりが完成しているとは言い切れない。幾つかの隘路を切り開き、幾つかの条件を整えて、これに対処することが新時代に課せられた、そして絶対に避けては通れない問題となっている。

最後に大会準備にあたりご尽力下された大会実行委員・担当委員の先生方、本部全国大会運営委員の先生方、それに同じく本部の事務局職員の方々に衷心よりお礼申し上げます。

◆会場校として◆

吉川 寛 (実行委員長)

大学英语教育学会第43回全国大会から早1ヶ月が過ぎました。厳しい残暑の続いた名古屋にも秋の気配が急速に深まっています。

今大会は、日本のほぼ中央に位置する名古屋で開催されたという地理的便利さもあり、参加者が連日800名を越える盛況ぶりとなり、大会会場校としても喜ばしい状況でした。実行面では、中部支部の先生方が夫々の役割分担に関する詳細な計画を立て、責務を確実に遂行して下さいました。院生、学部生の諸君も実に良く動いてくれましたし、中京大学の教職員や関係者が協力的且つ自発的にサポートしてくれたことにも頭が下がりました。多くの方々の協力が今大会の成功に繋がったことに感謝しております。

勿論、大会当日には、トラブルもありました。IT機器使用における発表者の準備不足により、IT担当委員が会場内を東奔西走する事態が続発したこと。展示物の搬入・搬出手順に問題が生じたこと等ですが、いずれの場合にも担当委員の適切な対応により、事なきを得ました。懇親会もホテルではなく、会場校内で開催され、通常大会とは異なる点に不安がありましたが、結果的には各方面からご好評をいただき、安堵した次第です。

今大会のテーマ『「国際語」としての英語—その教育目標と基準を考える』は、中部地区が日本における「国際英語」の研究・運動のイニシアティブをとって来た事実と連動するものでした。招待基調講演者のお一人としてマレーシアのギル先生にも来日いただきましたが、今大会の開催により、日本の「国際英語」基地としての中中部地区の活動が更に活性化されるものと思われます。世界初の国際英語学部を擁する会場校としましても、今大会の開催は誠に喜ばしいことでありました。

大会本部および中部支部の先生方をはじめ、大会に携わった多くの方々に支えられて実行委員長の大役を果たすことができました。心から感謝申し上げます。次期です。

理事会・評議員会・総会報告

代表幹事 見上 見

理事会、評議委員会について報告します。本部、支部ともに2003年度活動報告、決算について了承されました。また2004年度活動計画、予算についても了承されました。

2003年度活動報告概要

- (1) JACET通信No.139-143号の発行
- (2) 紀要No.37, No.38の発行

- (3) 全国大会の開催
- (4) セミナー等の開催 (サマーセミナー: 8月、春期英語教育セミナー: 3月)
- (5) 海外及び国内学術交流団体との交流派遣: 4月 IATEFLへEric Brendt氏、9月 Eric Brendt氏 AILA IC meeting、10月 English Australia Education Conferenceへ矢野安剛理事、10月 TEFLIN 田辺洋二会長、11月 Asia TEFLへ田辺洋二会長、11月 RELCへ中野美知子代表幹事、11月 JALT 森住衛副会長、11月 ALAK ロバート・ファウザー氏、11月 ETA-ROCへ鈴木千鶴子理事。
- (6) 本部月例研究・講演会 (233 - 240回) の開催と特

別講演会の開催
 (7) 研究会活動の助成: 研究会へ研究会補助費
 (8) 会員名簿の発行 (11月)
 (9) 支部大会の開催 括弧内は派遣者
 北海道支部
 7月12日(土) 藤女子大学 (大谷泰照氏) 100名
 東北支部
 12月6日(土) 秋田大学 (小池生夫特別顧問) 40名
 中部支部大会
 6月7日(土) 愛知大学 (中野美知子代表幹事) 150名
 中部支部談話会
 2月28日(土) 東海学園大学栄キャンパス (田辺洋二
 会長) 35名
 関西支部
 6月7日(土) 平安女学院大学 140名
 10月12日(日) 大阪女子大学 140名
 12月談話会 (森住衛副会長) 35名
 中国・四国支部
 6月8日(日) 山口大学 50名
 九州・沖縄支部
 10月12日(土) 大分県立芸術文化短期大学 (森住衛副
 会長) 100名

2004年度活動計画概要

- (1) JACET通信No.144-148号の発行
- (2) 紀要No.39, No.40の発行
- (3) 全国大会の開催
- (4) セミナー等の開催 (サマーセミナー: 8月、春期英
 語教育セミナー: 3月)
- (5) 海外及び国内学術交流団体との交流派遣:
 4月 IATEFL 中野秀子研究企画委員
 4月 RELC 大井恭子研究企画委員
 6月 KATE 樋口晶彦研究企画委員
 9月 矢野安剛理事 AILA IC meeting
 11月 JALT 田辺会長
 11月 ALAK 河内千栄子研究企画委員
 11月 ETA-ROC
 * 10月 English Australia Education Conference
 * 10月 TEFLIN
 * 11月 Asia TEFL
- (6) 本部月例研究・講演会 (241-247回) の開催と関
 東甲信越地区シンポジウム開催 (11月)
- (7) 研究会活動の助成: 研究会へ研究会補助費
- (8) 会員名簿の発行 (11月)
- (9) 支部大会の開催と役員派遣

新年度での役員の改選も認められました。
 [顧問] 推薦 鈴木博 畑中孝實 幸野 稔 田中春美
 [理事] 本部 (退任) 村田 年 鈴木 博 竹前文夫
 (新任) 中野美知子 杉本豊久 高橋貞雄
 北海道支部 (退任) 栗原豪彦 (新任) 西堀ゆり
 東北支部 (退任) 畑中孝實 幸野稔
 (新任) 千葉元信 尾形良道

中部支部 (退任) 吉川寛 (新任) 塩沢正
 中国四国支部 (退任) 増田豊 (新任) 門田幹夫
 [支部長]
 北海道支部 (退任) 森永正治 (新任) 西堀ゆり
 東北支部 (退任) 幸野稔 (新任) 千葉元信
 中部支部 (退任) 吉川寛 (新任) 倉橋洋子
 [評議員]
 本部 (退任) 阿知波真知子 浅野 博
 本名信行 中村匡克 西村嘉太郎
 大八木廣人 高橋貞雄 米山朝二
 北海道支部 (退任) 新井良夫 丸川桂子
 西堀ゆり 佐藤行敏
 (新任) 要春光 栗原豪彦 高井收
 東北支部 (退任) 千葉元信 尾形良道
 (新任) 小嶋英夫 渡部良典
 中部支部 (退任) 堀部憲夫 丹羽義信 塩沢正
 菅原光穂 田中春美 田中幸子
 (新任) 木村友保 小宮富子 吉川寛
 関西支部 (退任) 井狩幸男
 中国四国支部 (退任) 門田幹夫 三宅忠明
 九州沖縄支部 (退任) 玉城康雄
 [本部代表幹事] (退任) 中野美知子 (新任) 見上晃
 [本部副代表幹事] (退任) 杉本豊久 高橋貞雄
 (新任) 木村松雄 佐野富士子
 [幹事] 本部 (退任) 浅羽亮一 小田眞幸 田部滋
 (新任) 尾関直子 笹島茂
 北海道支部 (退任) 高井收
 (新任) 上野之江 新井良夫
 東北支部 (退任) 村野井仁 佐々木雅子
 (新任) 高橋潔
 中部支部 (退任) 小宮富子 大森裕實
 (新任) 木村友保 岡戸浩子
 関西支部 (退任) 梅咲敦子 (新任) 小栗裕子
 [研究企画委員] 省略

長年の本学会への貢献に感謝し栗原豪彦、畑中孝實、幸野稔、高梨庸雄、村田年、竹前文夫、鈴木博、吉川寛、増田豊、井門義男の各先生方に感謝状が贈られることになりました。(総会で贈呈)

本部会計では本年度は関東甲越地区発足に伴いこの地区の予算項目が新たに追加されました。また昨年度までの関東甲越地区に相当する地区での出版活動で得られた印税(編集必要費用を差し引いた額の半分、本来支部に分配される分)が今までは「本部」の特別会計という名目でプールされていましたが「関東甲越地区」の名目として繰り入れられることが了承されました。(総会でも了承されました)

また将来構想委員会の答申が確定し、それを受けて組織構成委員会から役員の70歳定年制と会長の直接選挙を実施の方向で議題として総会に諮ることになりました。(総会でも了承されました)

【基調講演 1】

Internationalise! The Story of Language Policy, Standards and Academic Competencies in Higher Education

講演者 Gill, Saran Kaur
(Universiti Kebangsaan Malaysia)
紹介 田辺洋二 (会長、東京国際大学)

In this century, the internationalization of education is a challenge that many countries around the globe are facing, irrespective of the linguistic histories they have. This paper will explicate the complex set of social, political, knowledge domination and economic reasons that impact on this and the implications for medium of instruction policy for Asian countries. The issue of medium of instruction policy evokes strong varying reactions but the stand taken in this paper will be a pragmatic one in line with institutional policies. A parallel will be traced with the challenges faced and the processes undertaken by European nations - nations which traditionally used only the mother-tongue as medium of instruction but which face the challenges of the internationalization of education by providing for education in the international language.

In the Asian context, the various challenges discussed above will be concretized via a case study of Malaysia — a post-colonial nation that for thirty years after independence adopted a strong nationalistic policy of implementing and managing Bahasa Melayu as the national language and the language of education and administration. Due to a number of reasons, as discussed above, which include the domination of English as the language of knowledge and the internationalisation of education, Malaysia is presently facing a major (shocking) reversal in language policy which is manifest through a re-adoption of English as the language of education for the science and technology disciplines in both the school system and higher education institutions.

In the context of higher education, the change in medium of instruction policy places tremendous pressure and demands on the academics. Therefore it is important in this context that the academics who belong to this “language transition generation” — in transition because they have been educated in Bahasa Melayu and are now switching over to English and are expected to perform and function effectively in English are provided with as much support as possible to ensure that the policy is implemented smoothly and successfully.

One of the crucial ways in which this can be done is by building up awareness of the benchmark of academic communicative competencies comprising both interactional and instructional competencies necessary for effective academic teaching. This benchmark is presently being

developed as part of a two year research project on “Language Policy and Planning for Higher Education in Malaysia: Responding to the Needs of the Knowledge Economy.” (Gill, Hazita, Norizan and Fadhil) The theoretical framework for the benchmark will address issues such as standards, linguistic challenges and cultural-pedagogical aspects essential for academics needing to operate in this linguistic transition period, not only in national but also demanding international contexts. Will it be possible to provide encouragement and motivation for these academics through the development of academic behavioural competencies as linguistic competencies are being worked on? Will it be possible to look at the complete process of communication not only as solely based on linguicism (language-centred) (a term coined by Spolsky, 2004) but also extends communication to include other aspects that can make teaching and learning in the field of science and technology creative, interesting and impactful?

(文責 Gill, Saran Kaur)

【招待講演 1-1】

「能動文法」の可能性

講演者 畑中 孝實 (東北学院大学名誉教授)
司会 村野井 仁 (東北学院大学)

本講演では、畑中先生の長年に渡る研究と教育実践に裏づけされた文法指導観および文法指導法が提示された。畑中先生が提唱される能動文法とは、「学習者に適応して、学習者が確実に自分のものとしうように、最も基本的で、数量的に最小(小)で、質的にはそれが基盤となって多様な英文を作成できるもの」である。多くの日本人英語学習者が、英語を話す、聞く、読む、書く際に、習ったはずの英文法を生かしていないという事実を正面から捉え、学生にとって運用可能であるものを独自の文法観に基づき、構築したものが能動文法である。

能動文法の内容としては、文型と文法事項が中心とされている。7つの基本的文型に、文法的・機能的役割および意味的・情動的役割を付与することによって、これらの文型がさまざまな事象を的確に表すことが可能となる。さらに照応関係、修飾、多重文、法性、テキスト性を考慮することによって、最小限の文法を拡大し、多様な英文を生成することができる。

能動文法を利用する手立てとして紹介された箱型ルールはプロダクション・システムを取り入れた画期的な試みでありながらも、学習者にとっても極めて扱い易いという優れた特徴を持っている。実際の文法指導に直接利用可能な高い実用性を備えたものであると思われる。能動文法は、なぜ学生が文法を役立てられないのかという問題に対し、長年向き合ってきた畑中先生の経験と研究が見事に結実したものであり、今後の文法指導の

あり方に大きな示唆を与えられる。

(文責 村野井 仁)

【招待講演 1-2】

Holding Conversations in English is a Challenge n da yone: Pragmatics and Talk in English and Japanese

講演者 Grundy, Peter (IATEFL President, Northumbria University)

司会 村田 久美子 (早稲田大学)

Professor Peter Grundy is a well-known pragmaticist and English language teaching specialist as well as the President of IATEFL, and his talk well reflected this background, dealing with the construal of talk-in-interaction, but simultaneously paying attention to the implications of the study for language pedagogy. He was also well-aware of the Japanese audience and the Convention theme, referring to Japanese in the analysis of English talk-in-interaction, and incorporating the idea of the role of English as a *lingua franca* in his talk.

The talk started with the introduction of the notion of 'thinking for speaking' (Slobin 1996) to apply it to the explication of 'talk-in-interaction'. He demonstrated whether this was possible on the basis of Chafe's (1994) 'three types of intonation unit, *fragmentary*, *substantive* and *regulatory*' and Langacker's (1991) notion of profiling. Using an extended exchange between a porter and a student at a British university's hall of residence, he demonstrated how 'regulatory intonation units' play important roles in English.

After the detailed analysis, he questioned the ways in which the function of the regulatory dimension had received very little attention and asked whether it should receive more attention in the future, given the changing status of English as a *lingua franca*.

Finally, he encouraged the audience to try translating his English example into Japanese to see whether the similar construal was possible in Japanese and to consider how we could incorporate interactional features in language teaching.

References

- Chafe, W. L. (1994). *Discourse, Consciousness and Time*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundation of Cognitive Grammar* Stanford: Stanford University Press.
- Slobin, D.I. (1996). From "Thought and Language" to "Thinking for Speaking". In Gumperz, J.J. & S.C. Levinson (eds.) *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.70-96.

(文責 村田久美子)

【シンポジウム 1-1】

授業における教員の英語使用の実態と課題 —中学校・高校教員の英語授業観察結果を中心に—

司会・提案者 石田 雅近 (清泉女子大学)
緑川 日出子 (昭和女子大学)
久村 研 (田園調布学園大学短大部)
酒井 志延 (千葉商科大学)
笹島 茂 (埼玉医科大学)

平成15年3月に文部科学省は、日本人に対する英語教育を抜本的に改善する目的で「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を発表した。この行動計画を推進するための一環として、昨年度に引き続き我々第3研究グループは、文科省から「英語教員が備えておくべき英語力の目標値についての研究」を委嘱された。本研究グループは、中等教育段階における英語教員の実際の授業に焦点を当て、英語教員として求められている「英語力」と「英語教授力」との関係性を明らかにすることを研究の目標とし、「英語で授業を行う」ために必要な「英語力」と「英語教授力」とはどのような要素から成り立っているかについて研究を進めてきた。

本シンポジウムでは、中学・高等学校の「通常の授業」を参観した結果を基に、教室における英語使用と日本語使用の実態を明らかにし、「効果的に授業を行う」上でそれぞれの言語使用の問題点を指摘した。また、英語授業力と教員の持つべき資質・能力等に関していくつかの具体的な提案を行った。

石田は委嘱研究の経緯と授業における「英語使用に関する調査」と「英語を用いた主な活動状況」を中心に報告した。次に久村は、中高教員の英語使用の実態を踏まえて「英語授業力の枠組み」と「授業で求められる資質・能力の要件」の提案を行った。さらに酒井は、「英語教員の持つ資質能力の構造」と「授業力の枠組み」を提案したのち、授業における自己チェック項目の例を提示した。笹島は、外国語教育をめぐる英語力や英語教授力の「スタンダード及びベンチマーク等」の海外調査の結果に基づいて報告を行った。最後に、緑川が今後のわが国における英語教員研修を充実に向けて「個人研修」、「公的研修」、「機関研修」の問題点と課題について提案を行った。フロアからは、英語授業における使用言語は学習者が何を学ぶ必要があるかの問題と密接に関わっているため、Needs Analysisが不可欠である等との問題指摘がなされた。

(文責 石田雅近)

【シンポジウム 1-2】

動機づけ研究における質的研究と 量的研究の融合

企画者・提案者 廣森友人（北海道大学大学院生）
提案者 磯田貴道（早稲田大学大学院生）
田中博晃（広島大学大学院生）
指定討論者 山森光陽（国立教育政策研究所）

本シンポジウムでは、いわゆる「量的」なアプローチが支配的な動機づけ研究の現状を鑑み、その改善を図るひとつの視点として「質的研究と量的研究の融合」について議論した。

まず廣森は、量的研究が抱える短所について、「全体傾向を捉えることに終始している」「一般的な動機づけを捉えることに終始している」という2つの観点から論じた。この問題提起を踏まえ、磯田氏、田中氏よりそれぞれの短所を補う具体的な研究アプローチが提案された。

磯田氏は、量的研究と質的研究の特徴を分類し、特に量的研究では全体傾向に主眼が置かれるが、質的研究は個人の経験を分析の対象とする点で両者が大きく異なることを指摘した。その上で、量的研究と質的研究の融合のひとつとして、質的研究の特徴である個人を記述することを目的とした量的研究の例を紹介した。

田中氏は、質的・量的研究の互いの利点を相乗的に生かすことを目的とした「仮説継承型アプローチ」による融合案を示した。その研究例として、内発的動機づけを促進する授業のあり方を扱い、仮説継承型アプローチの具体的な手順とその有効性を示した。またその中で、質的研究によって、教室での動機づけのダイナミズムを捉えることの重要性についても述べた。

以上の提言を踏まえて指定討論者である山森氏が、教育心理学の見地から討論を行った。具体的には、質的研究と量的研究の区別そのものもつナンセンスについて論じた。さらに、本シンポジウムにつながる過去2回のシンポジウムで扱われてきた、教室における動機づけ研究に代表されるような教育研究に必要なメタ研究理論として、問題解決継続という研究観を提示し、実践研究における科学性の担保について論じた。（文責 廣森友人）

【シンポジウム 1-3】

国際語としての英語に影響を及ぼす文化的 背景：良好な対人関係を築くために 〈待遇表現研究会〉

司会・発表者 堀素子（関西外国語大学）
発表者 津田早苗（東海学園大学）
村田泰美（中京大学）
大塚容子（岐阜聖徳学園大学）
重光由加（東京工芸大学）

村田和代（龍谷大学）
大谷麻美
（お茶の水女子大学大学院生）

待遇表現研究会の今年度のシンポジウムには準備したハンドアウトが足りなくなるほど多数の参加者があり、活発な質疑応答が行われた。

「あいづち」（大塚容子）：日本語話者はあいづちを多用するとの指摘があるが、日本語話者のあいづちの頻度は幾分高いものの、英語話者から違和感は表明されなかった。中国語話者と日本語話者との英語会話では、言語能力に差が見られたが、あいづちは会話を円滑にする上で有効であることが指摘された。

「ポーズ」（重光由加）：各話者のポーズ時間の比較によると英語話者はポーズ時間が一番短く、ポーズが長いと日本語話者が発話を終わっていかなくても、質問やコメントをする例も見られた。日本語話者と中国語話者は長いポーズに対して十分な許容度が見られた。

「笑い」（村田和代）：機能により笑いを7つに分類して分析した結果、日本人の英語能力が高いグループでは「仲間作りの笑い」が多く見られたが、会話になれないグループではあまり見られなかった。日本人と中国人の会話では「情報提供・質問の笑い」が多く見られた。

「Clarification」（津田早苗）：相手の発言を問い直す質問（CQ）と、自分の質問を言い換えて問い直す（FQ）に分けて見ると、英語が母語でない話者の英語のレベルが高い場合はCQが用いられ、英語力に差がある場合はFQが多く用いられていた。

4つの分析によりこれらのストラテジーはそれぞれ会話を円滑にする働きをすること、言語の違いにより、ストラテジーの用い方が異なることが示された。

（文責 津田早苗）

【シンポジウム 1-4】

短大英文学科における集中的英語教育 —学生の自律英語学習を促す 総合的アプローチ—

司会 福嶋秩子（県立新潟女子短期大学）
提案者 関 昭典（県立新潟女子短期大学）
Coulson, David（県立新潟女子短期大学）

まず、地方の公立短大である県立新潟女子短期大学の英文学科におけるこの10年の取組「学生の自律英語学習を促す総合的アプローチ」の概要について福嶋秩子が述べた。総合的な英語技能を高めることを第一義として、動機づけを高めるための様々な方策を総合的に行った結果、学生の英語能力が伸長、学生の自己評価・社会的評価も向上し、学生の自己実現につながっている。

第一の提案者David Coulsonは、「A Holistic Syllabus for Communication: fluency and accuracy through self-

expression」と題し、1年の統合的英語クラス「英語コミュニケーション」のシラバスについて述べた。このクラスは異文化交流行事のEnglish Dayと関連させて構成したこと、自己表現能力を伸ばすために、協調会話を進める方策（Team-Talking）を意識的に教え、ディベートも導入したこと、流暢さの向上だけでなく、正確さの向上も見られたことなどを報告した。第二の提案者、関昭典は「内発的動機づけを高め、自律性を向上させる英語学習プロセスモデル—実践と考察—」と題し、英語学習のやる気を引き出し高める方策を検討した。具体的には、レディネス形成・英語学習スキル形成・学習実行・学習成果測定/発表・原因帰属の5段階からなる英語学習のプロセスモデルを提案し、このモデルに基づいた実践の成果を述べた。そして、英語学習動機づけを高めるためには、授業・資格試験・CALL・異文化交流・自己学習など様々な学習機会を、学習者の中で有機的に結びつける支援をすることが重要であると指摘した。

討議では、English Dayの実際や事前指導の方法、「資格英語」の授業の進め方、教育方法の変更に対する学生の反応、レベル差への対応などについて質疑が行われた。

（文責 福嶋秩子）

【シンポジウム 1-5】

日本人英語学習者の文理解プロセスの 解明に向けて —ガーデンパス文の処理を中心に—

司会・提案者 吉田晴世（大阪教育大学）
提案者 横川博一（神戸大学）
吉田信介（立命館大学）
倉本充子（広島国際大学）

はじめに、横川博一氏（神戸大）は、心理言語学における文理解研究の概要、既存の文理解モデルの紹介、ガーデンパス(GP)現象について説明され、第2言語習得研究における「処理」の観点の重要性を強調された。

次に、吉田信介氏（立命館大）は、日本人英語学習者に「英文理解の難易度に関する調査」と「語彙レベルテスト」を実施した結果を報告された。非GP文因子があること、GP文には「一般的GP文」、「目的語位置埋込文+語彙範疇曖昧文」（以上、難しい）、「意味・語用論的GP文」（易しい）の3種類があること、語彙力とGP文理解とに高い相関があること、日本人英語学習者の場合、GP文の難易度を語彙の親密度や文の長さから判断している可能性があること、が判明し、その考察をされた。

続いて、倉本充子氏（広島国際大）は、英語母語話者に対して、日本人英語学習者と同じ調査刺激文を用いて実施し、結果を報告された。易しいものから順に、非GP文「修飾句なし・より少ない語数」→非GP文「修飾句つき・より多い語数」→GP文「構成素誤認度がより低い」→GP文「構成素誤認度がより高い」の4因子が現

れた。英語母語話者はGP文と非GP文を区別し、難易度を主に構成素の取り出し易さに関連する要素を基準として判断していることが示唆された。

両氏のオフライン結果を進めて、吉田晴世氏（大阪教育大）は、オンラインによる日本人上級英語学習者の実験データの分析結果から、GP文は英語母語話者同様、処理困難性が心理的に実在する可能性があり、統語的要因と意味的要因それぞれがGP文の理解度に与える影響について勘案された。

最後に、横川氏は、日本人英語学習者を対象としたオフラインおよびオンラインデータ、過去の先行研究などを踏まえて、文理解モデルについて考察された。

（文責 吉田 春世）

【シンポジウム 1-6】

コミュニケーションを目指すライティング 指導—新しい方向を求めて— 〈JACETライティング研究会〉

司会 山森孝彦（愛知医科大学）
提案者 伊藤光彦（豊橋技術科学大学）
小島由美（安城学園高校）
石橋千鶴子（愛知淑徳大学）
Toff, Mika（愛知淑徳大学）

和文英訳の英作文から脱却して、自分の頭で考え、自分の心で感じたことを、自分の言葉で表現するコミュニケーション活動をいかにして授業の中に多く取り入れ、そのライティング活動をいかにして質の高いものへと発展できるか。今回は、こうした目的意識をもって行われた5つの実践報告を発表した。

伊藤の「必須科目としての英語授業でのLife Writing（自分史）指導の実践報告」では、和文英訳の束縛から解放し自分の知っている言葉で自分の言いたいことを書く活動について、学生の感想の分析も交えて発表した。

小島の「総合学習ゼミ『英語パフォーマンス講座』の実践報告」では、Thinking Sheetを使って教師が生徒とコミュニケーションを取りながら、内容をふくらませていく過程について発表した。

山森の「時事英語の授業から模擬国連開催へ向けて」では、どのようにして知的好奇心を刺激してグローバルな問題について関心を持たせ、自分の意見を書かせるようにするかという指導の実践報告をした。

石橋の「非英語専攻学生に対するパラグラフ・ライティング指導」では、30-40人というクラスサイズでのライティング指導に焦点をあて、パラグラフ概念の定着が支持文の創出を促すとの実践報告を行った。

Toffの「E-mailとLife Writing指導におけるフィードバック」では、学生の意識を目覚めさせ、心深くにある内容を引き出して書かせる過程を、実際に学生の書いた文章が、変化していく様子見せながら発表した。

会場には予想を超える多くの参加者があり、また、フ

ロアからはライティングにおいて文法指導をどの段階で行うかといった具体的な指導法に関する質問も出るなど、最近のライティング指導の関心の高さがうかがえた。

(文責 山森孝彦)

【招待講演 2-1】

The Practice and Teaching of Oral Interpretation

講演者 幸野 稔 (秋田大学)
司会 千葉元信 (宮城工業高等専門学校)

In his address, Professor Emeritus Minoru Kono at Akita University talked about the practice and teaching of oral interpretation, specifically in conjunction with the projects of JACET Oral Communication Special Interest Group (JACET OC SIG).

Professor Emeritus Kono began his lecture with some of his earlier studying and teaching experiences of “oral interpretation (OI).” Then he proceeded to describe how he was involved in 1993 in the OI collaboration project with Dr. Margaret Pryately, St. Cloud State University, Minnesota, USA. After that he coached voluntary students in oral interpretation, and had them participate in the JACET Oral Communication Festival from the time it started in 1996. A description of his work can be found in his JACET OC SIG publication, 2002.

He discussed how he worked with the students in his English Pronunciation Teaching Course. It aimed at developing students’ skills to interpret orally the messages conveyed by written texts and to express them prosodically, as well as developing their pedagogical skills to teach English pronunciation effectively. It also covered nonverbal expressions in the form of dramatic performance.

He showed the audience his students’ extra-curricular activities and their final performance in the video. Through the video, he reminded us not only of the main effects of OI, but also of its additional effects, that is, an intrapersonal healing effect and an interpersonal effect of developing friendship and solidarity. OI has exercised those effects both in terms of his personal life and his teaching career of English.

At the end of his lecture, Professor Emeritus Kono gave the audience an actual demonstration of oral interpretation of *Le Petit Prince* by Antoine de Saint-Exupery in his eloquent and beautiful French, which created a strong and lasting impression on the audience. (文責 千葉元信)

【招待講演 2-2】

The Output Hypothesis: How and What

講演者 Lee, Haemoon
(KATE, Sungkyunwan University)
司会 Fouser, Robert J. (京都大学)

In her invited lecture, Dr. Lee offered a new look at the output hypothesis that was first proposed by Merrill Swain in 1985. The output hypothesis states that pushing learners to produce output facilitates acquisition because learners are more attentive to grammatical form in production than in comprehension. Though comprehension-first input hypothesis remains the dominant paradigm in SLA research, the output hypothesis maintains a small but loyal following among SLA researchers.

To investigate the output hypothesis, Dr. Lee focused her research questions on the role of attention in the acquisition of vocabulary and structural forms. In her experiment, Dr. Lee divided 44 Korean university students into pairs with a speaker and a listener. The speaker read a short humorous story and then told it to the listener without reading the text. The speaker and listener both looked at a picture that related to the contents of the story. The listener then read the story to confirm what he or she had heard. The story included eight target lexical items and nine collocations of lexical items as structural forms. The following patterns were observed in interaction: underlining during the reading session, meaning negotiation during the interaction, and speaking or listening to the target forms during the interaction.

Results of the experiment showed that the production mode does not imply greater attention than the comprehension mode. In both processing modes, vocabulary received more attention than word collocations. Production of target language vocabulary proved to be a good indicator of retention, which suggests that speaking the target form is beneficial to vocabulary acquisition.

Dr. Lee’s lecture was followed by a lively discussion session that focused mainly on the conditions for vocabulary acquisition and prospects for future research on the output hypothesis. The lecture and discussion also helped members of the audience gain insight into English education at the university level in Korea. (文責 Fouser, Robert J.)

【私の授業】

司会 小林ひろみ (文教大学)

1. 高大連携模擬授業と委託訓練授業の一端
倉田 誠 (京都外国語大学)
Smith, Craig (京都外国語大学)

2. 時事英語を利用したライティング指導

木村友保 (名古屋外国語大学)

3. ブロードバンド時代に授業をデザインする —英語ライティング・クラスでの情報化と 教育連携—

西堀ゆり (北海道大学)

倉田誠氏と Craig Smith 氏の発表は、最近活発化している高大連携の例として、大学が出張授業を行なうものであった。教員同士の綿密な連携のあるチーム・ティーチングの手法で、使用頻度の高い基本動詞の基本的概念を拡大して理解させていく、1回完結型の授業であった。かなりの部分は英語で運用するが、ときおり日本語を入れて確認を行っており、日本人とネイティブの2名の教員が組むことの意義であろう。

木村友保氏の発表は、時事英語を利用して自分の意見にまで発展させるライティング指導の例であった。学生間のインタラクションや教師による個別指導も含めた周知なプランニングにそってプロダクションのプロセスを学習させる手法は、大変参考になった。名古屋外国語大学では2004年度から Writing & Presentation はすべて12名程度の小クラスで実施しているとのことで、授業成果を出すための決意が読み取れた。

最期の西堀ゆり氏の発表もライティングにからむものであったが、こちらはブロードバンドでアクセスがますます容易になっている IT ネットワークを利用し、海外の大学との合同授業や、大学付属病院の院内学級にいる小学生のための翻訳支援も行なう意欲的な取組みであった。IT 環境については大学差があるが、学内チャットの利用や英文ホームページの作成など、他大学でも応用可能な手法も多く取り入れられており、示唆に富んでいた。

今回は3件の発表となったため、もう少し質疑応答に時間をかけて掘り下げたいと感じた人もあるかもしれない。しかしその反面、フロアからの反応をみてもそれぞれ角度の異なる発表が、多様なニーズをもった参加者の授業改善のヒントになったと考えられる。

(文責 小林ひろみ)

【招待講演 3-1】

横目で見ると日本の英語教育

講演者 伊部 哲 (元専修大学)

司会 神保 尚武 (早稲田大学)

伊部先生は東京教育大学文学部で英米文学英語学を専攻された。卒業後、共立女子中学校で4年勤務された。

次に都立九段高校に転出された。都教委の英語の研究協力校であったため、授業を指導主事によく見られた。Oral Method の流れをくむ教え方であった。CWAJ の前身である College Women's Association から授業のお手伝いがあり、今の ALT を先取りした体制であった。

8年後に都立新宿高校に転動された。ここでも Oral Method が中心であった。英会話や自由作文等も担当した。英語を多用した授業が良かったと総括された。受験を振りかざした文法・訳読中心の授業は、たいした工夫もいらない楽な教え方であると批判された。

9年後に東京家政大学へ移られた。読解授業では試験に英文和訳は出さなかった。英文を読むことは日本語に訳すことだと思こんでいる学生の意識を変えるためであった。

最後の19年間は専修大学で英語教員養成担当者となった。英語教員がプロとして自覚・自立し、責任を持って教育にあたるのが重要だと述べられた。

JACET では、小中高大にわたる英語教育実態調査にかかわり、委員長として8年間に5冊の報告書をまとめた。

JACET の今後の活動に、教育業績の評価基準の作成、日本人に適した英語学習法の開発などを示唆された。

(文責 神保尚武)

【招待講演 3-2】

English an International Language: The Singapore Experience

講演者 Foley, Joseph A. (SEAMEO RELC)

司会 山内ひさ子 (久留米工業大学)

Dr. J. A. Foley is currently in the Specialist Department at RELC, Singapore, and the editor of the RELC Journal. He joined the 43rd JACET National conference as a representative guest speaker, and his lecture reflected his long teaching experience with a new movement in teaching English in Singapore.

Prof. Foley started his lecture by introducing the present debate in Singapore: "what form of English" should be used as an international language. Historically, English became one of the official languages after the independence in 1960s because (1) it was the language used in science and technology, (2) the language to modernize economy, (3) the language to stabilize the country in its acceptability as the common language by the multilingual and multicultural population.

After the 40 years' of its bilingual policy treating English as L1 and the mother tongue, L2, there have been changes in the language used at home. Particularly for children of the age group between 5 to 14, the percentage using English dominantly at home has increased, for example, from 23% in 1990 to 36% in 2000 among the children with Chinese cultural backgrounds. Therefore, for them English is no longer L2 but L1. However, colloquial English in Singapore (CSE) has features of code-mixing/code-switching with their ethnic languages. These characteristics are seen at all levels: grammar, lexis, and pronunciation. CSE or "Singlish" has often been regarded as simply a

defective form of English, and this has been reflected in the movement in Singapore to "Speak Good English." According to the advocators of this movement, subject teachers are first of all required to speak correct English, and teachers who are wanting in "Standard English" should make efforts to learn it themselves.

Prof. Foley argued that the definition of "Standard English" in the context of English as an international language and as a tool of international communication needs refining. The goal of the user of English should not be to sound as much like an American, British, or Australian as possible but speak grammatically and lexically appropriate English as a Japanese, Indian or Singaporean. In fact, English is often taught with little variation in basic grammar and core vocabulary in our EFL classrooms. However, in order to maintain the identity of the speakers' culture, materials to be used in the classroom are the key: the materials should demonstrate how the culture of native-English people is perceived by themselves and other people, and also how the learners' own culture is perceived by the people of target culture and their own people. His conclusion was that the evolution of English as an international language is a process of constructing "identity" of the learners within their own culture and the culture of others, not necessarily always focusing on the culture of English speaking countries.

His lecture was very informative and inspiring. There is obviously much to learn for us from the Singapore experience when we teach English as the language of international communication. (文責 山内ひさ子)

【招待講演 4】

三河弁からピジン英語へ

講演者 田中幸子 (椋山女学園大学名誉教授)
司会 倉橋洋子 (東海学園大学)

この講演では、田中幸子氏の母語の獲得から非母語や異文化との接触、教育・研究が話題になった。講演者は三河弁を母語として獲得されたが、言語に対する敏感さの源泉はここに端を発すると思われた。

講演者の非母語・異文化との接触は英語や、フランス語を通して始まり、スウェーデンの宣教師を通してスウェーデン語やその文化にも触れられた。70年代ミクロネシアのプロアナ語との出会いが、本格的な統語研究の始まりとなった。講演者の豊富な言語体験は、言語に対する公平性、異文化に対する偏見のなさを物語っている。英語の変種の具体例として、「19世紀における黒人英語」、「ハワイクレオール英語」の資料を基に語られた。19世紀の黒人英語の例は、H. B. Stowe 夫人の "Sojourner Truth" (1868) の抜粋から取られた。その特徴は、the → de, you → ye, You have heard of me → You's heard

o'me, against → agin 等の音の変化等である。ハワイクレオール英語の例は、子供たちの日常生活を描いた短編小説 Darrell H.Y. Lum の "Beer Can Hat" (1980) の抜粋から取られ、子音群の単音化や不定詞 to の省略など、両者に共通の文法体系がみられた。

最後に「スウェーデンにおける母語と英語の役割」の資料として、*Managing Multilingualism in a European Nation-state* (2001) が紹介された。スウェーデンでは1999年に小学1年生から英語教育が開始され、英語の習得は進学やその後の社会的地位の確保につながる。しかし、この資料では、「書かれたテキストもスウェーデン語の特徴を残すべきではないか」と主張されている。日本の英語教育においても、言語と文化の多様性を認め、その優劣、標準への強制、抑圧などについて無関心であってはいけないと考えさせられた。(文責 倉橋洋子)

【基調講演 2】

英語教育の目的と方法 —受難の時代の英語教師—

講演者 田中克彦 (中京大学)
紹介 吉川寛 (中京大学)

すべての人にとって英語を知っていることが当然とされるほどまでに、その知識が大衆化した今日は、英語教師にとって良き時代というよりは、むしろ受難の時代である。とりわけ大学で英語を教える教師にとっては。

一般に外国語の教育は、まずは動機づけのない知識を強制するだけに終始し、創造的・発見的ではない。それは典型的な「記憶学科」に属する。記憶を強いる代表的な学科は歴史、地理であるが、そこには物語がある。物語は想像力を刺激し、学習者自身が発展させる余地が残されている。つまり、人間理解と世界の認識という自発的活動と、直接、間接にむすびついている。別のことばで言えば、「内容」がある。

それに対して言語そのものは形式であって「無内容」であるから、学校の教科の中では最も抽象的にならざるを得ない。抽象的であっても、「理」によって一貫している数学とは異なる。

そこで教師は、言語そのものという形式だけを教えるのではなく、そこにさまざまな内容を盛り込んで学生を引きつけようとするが、それは言語教育の本質には属さず、単なる戦術にすぎない。

英語という言語そのものが関心の対象になるためには、言語それじたいが物語性を帯びるような工夫がなければならない。そのためには英語が孤立してではなく、ヨーロッパ諸語と、時には中国語との対照においてその特性を見ることが有益であろう。事実それら、英語以外の外国語の教授にあたっては、語源的説明にも文法的説明にも英語の知識が大幅に利用されているではないか。

かつて、またいまも、英語の教師が英語以外の外国語の知識を援用することは、英語の教育にとって余計で

あり、むしろ阻害するものと受けとられるとすれば、それは誤りであろう。英語の教師が英語以外の外国語に目を向けないように禁欲するとしても、学生はいわゆる第二外国語を学ぶことによってある程度その知識を身につけ、ときにはそれらの言語に英語以上の関心を抱いていることもある。

とりわけ、英語はますます大学における外国語教育を独占しようという勢いであるから、それが世界の多言語状態を理解するための窓になることが期待される。

物語性を生み出す第二の方法は、英語の歴史的知識を教えることに躊躇しないことである。私自身は記述言語学を学ぶことによって、共時的潔癖主義をまもってきたけれども、それは誤りであったと反省している。英語の形態論の全体を通じて、屈折原理と類推作用がいかにその歴史をいどってきたかという知識は、中学生にとつてすら、きわめて興味ぶかいものであることを、私自身の経験によって知っている。

以上は、大会当日の私の講演のために、準備はしたが口にするのをはばかったことどもをも加えて、いま一度整理しなおしたものである。(文責 田中克彦)

【特別招待講演】

Language Teachers as Action Researchers: What is the Meaning of “Action” in “Action Research”?

講演者 Curtis, Andy (Queen’s University)
司会 森住 衛 (桜美林大学)

Introduction

Understandably, most writers and researchers tend to focus on defining and describing the “research” part of “action research”, as this seems to be the most obvious place on which to focus given some of the complex challenges of carrying out research. However, this focus on the second part of the phrase has obscured, to some extent, the importance of the first part. In an attempt to re-balance the relationship between the two terms and the two notions, I focused part of my presentation on the action, using different definitions from a variety of standard (English-English) online and print dictionaries.

Focusing on the Action

According to the American Heritage Dictionary of the English Language (2000), action is: “Organized activity to accomplish an objective”. The example given by the lexicographers is: “a problem requiring drastic action”. This is interesting because one of the common problems of action research, somewhat ironically, is the way in which it is “problematized”. That is, the way in which such research often focuses on a particular problem that needs a solution, a breakdown that needs to be repaired, or a mistake that

needs to be corrected. This is a good example of the “deficiency model” at work. However, many teachers and students enjoy great success in their language classrooms everyday, though these generally seem somehow less worthy of systematic enquiry.

The same dictionary (American Heritage) gives another meaning of action: “the causation of change by the exertion of power or a natural process”. The focus here is on the change aspect of “action” in “action research”, which is central to such research, but also on “power”, also central, as it is often the existing power structures that are being challenged within an action research paradigm, and it is those structures that resist change. This focus on power is also central to the definition of “action” given in the American Heritage Stedman’s Medical Dictionary (2002): “A change that occurs in the body or in a bodily organ as a result of its functioning. Exertion of force or power.”

The External-Internal Division of Action

The third American Heritage definition (of nearly a dozen) that is relevant here defines “action” as: “a physical change, as in position, mass, or energy, that an object or a system undergoes.” This is important because the change in action research can be as much internal and unobservable as external, as this may be a change in understanding, rather than only referring to an observable change in behavior. This external focus is similar to the Merriam-Webster Dictionary of Law (1996) definition: “a voluntary act of will that manifests itself externally: a mode of conduct.” An interesting physiological-physical distinction is used in Webster’s Revised Unabridged Dictionary (1996), which contrasts the physiological definition: “any one of the active processes going on in an organism” with the oratorical: “gesticulation; the external deportment of the speaker, or the suiting of his attitude, voice, gestures, and countenance, to the subject, or to the feelings”.

Conclusion

Shifting the focus in “action research” from the “research” to the “action” may help us re-examine and re-consider some of the key aspects of such research, and help us develop our understanding of why and how we engage in this kind research activity.

References

- American Heritage Dictionary of the English Language*. 2000. Houghton Mifflin.
American Heritage Stedman’s Medical Dictionary. 2002. Houghton Mifflin.
Merriam-Webster Dictionary of Law. 1996. Merriam-Webster.
Webster’s Revised Unabridged Dictionary. 1996. MICRA.
(文責 Curtis, Andy)

【シンポジウム 2-1】

JACET 8000 に基づく語彙の応用研究 〈英語語彙研究会企画〉

司会・報告者 清水伸一（安城学園高等学校）
報告者 村田 年（和洋女子大学）
石川慎一郎（神奈川大学）
上村俊彦（県立長崎シーボルト大学）
相澤一美（東京電機大学）
杉森直樹（立命館大学）

今回のシンポジウムでは、「中・高・大学における語彙指導」を中心に、以下の6本の報告がなされた。

「JACET8000と大学生の英作文」（上村）では、大学生の作文の語彙レベル分析の他、Collocates、Clusters等による分析結果が報告された。

「JACET8000によるテスト分析」（相澤）では、テスト分析の報告とともに、J8とWord Familyを比較することにより、J8レベル4とAcademic Vocabularyの重なりが大きいことが報告された。

「大学生の語彙力の実態について：JACET8000に基づく試行調査」（石川）では、独自に開発された語彙テストと、TOEIC等他のテストとの相関性が報告された。また、一般的な大学生の語彙は約5,000語であることも報告された。

「適応型語彙テストの開発に向けた日本人英語学習者の語彙力調査」（杉森）では、NIMEで開発中の適応型テストの語彙レベルとJ8の語彙レベルの相関性が報告された。

「JACET8000をスケールとして学習指導要領の制限語彙および中学校教科書語彙を検討する」（村田）では、中学教科書コーパスとJ8を比較し、中学教科書に発信用語彙が多いことが報告された。また、用途に合わせた複数の語彙リストの必要性が提言された。

「JACET8000レベルタグを付与したコーパスの構築と利用」（清水）では、高校・大学の入試問題をベースにした、J8に基づく例文検索システム(<http://www01.tcp-ip.or.jp/~shin/exs/>)が紹介された。（文責 清水伸一）

【シンポジウム 2-3】

テスト開発に向けての 大学生の英語学力の研究

司会・提案者 石川 祥一（実践女子大学）
提案者 小林 ひろみ（文教大学）
中村 優治（東京経済大学）

本研究グループでは大学生の英語学力を評価・測定（2年修了時、または卒業時）するためのテストの研究開発を行っている。本シンポジウムでは、大学生の英語学力到達度について、学力設定とテスト開発について大学

英語教員へのアンケート調査を実施した。この分析結果を土台とした英語学力の到達度設定について提案した。

石川は、大学英語教育の現況を述べ、現時点では大学生の英語学力について到達度を設定、または目標値の設定に対して必ずしも英語教育界の共通した認識にはっていない。英語学力を適切に評価・測定するテスト開発に取り組んでいるが、そのためにも大学生を対象とした英語学力の到達度を設定する必要があることを提案。

中村は、英語学力を4つの視点：①英語学力の本質という観点、②英語学力の理論的構成要素、③各種英語能力テストのテスト問題、内容、形式、④教師の経験に基づく考え方、から捉えて設定すべきであると論じた。アンケート調査を踏まえて、TOEIC、TOEFLなどがテスト形式として好まれる理由、及びこれらに加えて英検などのテストが測ろうとしている英語能力とはどのようなものであるかを問い直すことが必要であるとした。

小林は、大学生の英語学力低下について、「昔はできた」という傾向があると指摘した上で、大学進学率を考慮して考えるべきであるとした。アンケート調査から、「英語学力の到達目標の設定」は全体の半数以上（回答数192）が何らかの到達目標を設定あるいは想定をしている、「英検を基準とした英語学力の設定」では、大学や学部（学科）などで設定する場合は英検2級程度となっているが、教授者が基準設定を行っている場合は英検準1級程度に上がっていることが報告された。

（文責 石川祥一）

【ワークショップ 1】

Standard Speaking Test (SST) Corpus の公開と研究・教育利用

発表者 投野由紀夫（明海大学）
和泉絵美（通信総合研究所）
金子恵美子（（株）アルク）

本ワークショップは、独立行政法人情報通信研究機構(NICT)を中心に、株式会社アルク、そして数名の人文系研究者が共同で開発したThe NICT JLE Corpus (200万語強の日本人英語学習者の話し言葉コーパス)の公開に向けて、そのコーパス構築の過程とデータの利用方法、一部の研究成果を紹介したものである。

まず第1部では投野（明海大学）が、プロジェクト全体の位置づけを、世界的な学習者コーパス構築の流れの中で説明し、続いて和泉（情報通信研究機構）が平成12年から16年までのプロジェクトの全体像を述べた。金子（アルク）は、1300名弱のデータのソースとなったStandard Speaking Test(SST)に関して解説を行い、さらに和泉がデータ処理の実際を解説、プロジェクトの成果物であるコーパス書き起こしソフト、コーパス検索ソフトの紹介も行った。

第2部では、The NICT JLE Corpusを用いた実際の分析例を3件紹介した。まず投野は9段階の学習者レベル

ごとの発表語彙の特徴分析を行った。各レベルごとの語彙リストの比較分析、また、n-gram統計を用いた単語連鎖の発達状況を記述した。金子は名詞句の発達に関して名詞句の長さ、後置修飾のバタンの変化、誤答分析などを絡めて詳述した。最後に和泉がNICTで行った自然言語処理の手法を応用した分析例として、新たなデータに対するSST自動レベル判定の可能性、およびエラーの自動修正プログラムの効果の2点を紹介した。

新しい言語習得・学習の研究リソースとして、本コーパスの公開は大きな意義を持つ。研究者・英語教員諸氏の活用を願ってやまない。(文責 投野由紀夫)

【ワークショップ 2】

Stepping Back, Inside Ourselves: Metaphors of Movement in Professional Development

Curtis, Andy (Queen's University)

Introduction

The subtitle of the invited workshop refers to *Metaphors of Movement*, as these are key to the conceptualization and articulation of a deliberate, conscious and systematic stepping back in order to engage in reflective practice and professional development in the field of English language teaching and learning. This summary will, therefore, focus on the origins and uses of this notion of *stepping back*.

Origins of the Metaphor

George Lakoff and Mark Johnson's seminal work, *Metaphors We Live By* (1980), showed that the impact of metaphors in our lives can be traced back in all languages and cultures. As they put it: "metaphor is pervasive in everyday life, not just in language but in thought and action" (p.3). However, the modern use of *stepping back* can be traced back to the 1960s, when one defining moment in history appears to have crystallized the concept: the first steps of mankind on the moon in July of 1969, when the now famous line was uttered by Neil Armstrong: "It's one small step for man, one giant leap for mankind" (cbsnews.com/stories).

Diverse Uses of the Metaphor

Since the first lunar landing, the notion of stepping back has been widely employed, especially in the clinical sciences, such as biology, an example of which is found in a paper in the *American Journal of Cell Physiology* on the "downregulation of G proteins as a mechanism of desensitization in tissues" entitled *Stepping Back and Looking Forward* (Jasper, 1998). From a related field, came a paper in the *Journal of Structural Biology* on "the use of low-resolution density maps from atomic models",

subtitled *How Stepping Back Can be a Step Forward* (Belnap, Kumar, Folk, Smith and Baker, 1999).

A "web log", also referred to as a "blog", is: "A website that displays in chronological order the postings by one or more individuals and usually has links to comments on specific postings" (yourdictionary.com). Some of the earliest of these were started by scientists and one, from a 1999 *Science Blog*, reported on the use of satellites to study global hydrology and climate, with an article subtitled *Stepping Back to Get a Closer View*.

The notion of stepping back, often linked to its opposite movement and motion, stepping forward, is also prevalent in the field of politics. Examples include Katha Pollitt's article (2000) on the United Nations' Annual Conference on Women, entitled *Stepping Forward, Stepping Back*, Jeremy Gans' report in *AIDS in Asia* (2003), the title of which asks the question: *Stepping Back from the Brink?* and Daniel Smith's Foreign Policy in Focus piece entitled *Stepping Back on Israel-Palestine* (2004).

Two of the most recent and relevant examples of the use of this notion are Dana Sobrya's review of the book *The Learning Paradigm College* (Tagg, 2003) which appeared in the *Chronicle of Higher Education* (2003) under the title: *An English Professor Recommends Stepping Back to See 'the Whole Experience' of Learners*, and the use of the complementary opposites in the 2004 Olympics report from the NBC online news agency, with a report entitled *Stepping Back to Move Forward*.

Conclusion

According to Lakoff and Johnson "Our ordinary conceptual system, in terms of which we both think and act, is fundamentally metaphorical in nature" (1980, p. 3). If this is true, it is clear that the use of the metaphor and the notion of *stepping back* is an essential enabling aspect of reflective practice.

References

- Belnap, D.M., Kumar, A., Folk, J.T., Smith, J.T. & Baker, T.S. (1999). Low-resolution density maps from atomic models: How stepping "back" can be a step "forward". *Journal of Structural Biology*, 125, 2-3. www.ncbi.nlm.nih.gov
- Gains, J. (2003). *AIDS in Asia: Stepping back from the brink?* *Alternatives*. www.alternatives.ca
- Jasper, J.R. (1998). Stepping back and looking forward: Downregulation of G proteins as a mechanism of desensitization in tissues. *American Journal of Cell Physiology*, 275, 3. <http://ajpcell.physiology.org>
- Lakoff, G. Mark Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Pollit, K. (2000). *Stepping Forward, Stepping Back*. *The Nation*. www.workingforchange.com

Science Blog. NASA/Marshall Space Flight Center - Space Science Laboratory: Stepping back to get a closer view. www.scienceblog.com/community

Sobyra, D. (2003). An English Professor Recommends Stepping Back to See 'the Whole Experience' of Learners. *The Chronicle of Higher Education*. <http://chronicle.com/teaching/books>

Smith, D. (2004). Stepping Back on Israel-Palestine. *Foreign Policy In Focus*. www.fpf.org

Tagg, J. (2003). *The Learning Paradigm College*. Bolton, MA: Anker

Walters, J. (2004). Stepping Back to Move Forward. *NBC Olympics*. www.NBCOlympics.com

(文責 Curtis, Andy)

【特別報告】

諸外国の初等・中等教育における 外国語（英語）教育課程の現状

報告者

アメリカ・中国	田中 慎也 (桜美林大学)
台湾	相川真佐夫 (京都外国語短期大学)
韓国	Fouser, Robert (京都大学)
	木下 正義 (福岡国際大学)
シンガポール	田嶋 ティナ宏子 (白百合女子大学)
ドイツ	杉谷真佐子 (関西大学)
フランス	古石篤子 (慶應義塾大学)
イギリス	中尾正史 (桐朋学園大学短期大学部)
統括報告者	渡邊寛治 (国立教育政策研究所)

平成9年度より実施されてきた諸外国の小学校・中学校及び高等学校の「教科等の構成と開発に関する調査研究」の一環として行われた調査報告の一部を公表し、今後の我が国の教育課程の改善並びに教科等の構成の在り方に関する方向を探った。(文責 田中慎也)

【シンポジウム 3-1】

医学・看護系および工学系 ESP のための シラバスと教材開発にむけたニーズ分析 (JACET 九州沖縄 ESP 研究会企画)

司会・提案者	横山彰三 (宮崎大学)
提案者	安浪誠祐 (熊本大学)
	山内ひさ子 (久留米工業大学)
	川北直子 (宮崎県立看護大学)

今回我々は、科学研究費補助金による研究（研究課題：ESP 教授法に基づく大学専門英語教育のための効果的シラバスと教材開発の研究、研究代表：横山彰三）についての中間報告を兼ねて本シンポジウムを企画した。発表者はまず、各自の勤務校で学生および教員に対して実施した英語教育についてのニーズ分析結果を報告した

(山内が工学部、安浪が医学部、川北が看護学部、横山が医学部について発表した)。近年のコミュニケーション志向を反映して教育現場のニーズは「話す、聞く」ことが中心と予想したが、かなり違う様相を呈していることが明らかになった。今回の報告から判断する限りにおいては、医学、看護、工学のいずれの分野においても、専門教育でもっとも必要とされている英語能力は「読解力」であった。どの分野においても、専門教員から見た学生の英文読解力低下がかなり著しい。さらに「専門教育を実施する上で学生の英語力に問題はるか」との質問に対して、専門教員の7割以上が問題有りとしており、今後なんらかの早急な手だてが必要である。一方、コミュニケーション能力の重要性についての認識は、教員・学生ともに高いが、その正確な内容について明確に把握しているかどうかは疑問の残る結果となった。今後さらに調査すべき点である。会場は50名近くの参加者で埋まり、関心の高さが伺われた。質疑の時間が短くなったが、終了後も個別に熱心な意見交換が続いていた。2005年3月には本研究の最終報告をHP上で公開するので、会場の希望者からメールアドレスをお聞きして後日お知らせすることとした。(文責 横山彰三)

【シンポジウム 3-2】

外国語学習動機研究の新たな展開と可能性

司会・提案者	八島智子 (関西大学)
提案者	竹内 理 (関西大学)
	中田賀之 (兵庫教育大学)

本シンポジウムでは、新たに関心が高まっている動機付け研究について、多様な研究の理論的基盤や研究法を展望した上で、英語教育や実践への貢献の可能性について議論した。

まず八島が社会心理学的な研究のその後の展開について、民族間の関係を移す鏡としての学習理由研究を論じた。これは「言語と話す人・文化を切り離さない」アプローチで、伝統的な概念、*Integrativeness* (統合的傾向)がその核となる。世界各地での研究例を紹介し、言語学習がvalue-freeではなく、社会政治的な変化にリンクしていることに気づかせるという意義を指摘した。さらに、*Integrativeness*を「目標言語文化と関わる自己概念との同一化」と考える再解釈を紹介した。その日本での展開の可能性として、英語学習の意味を自分が世界とどう関わるかという意識を作るものと捉え、他者との意味の共有を通して「英語を使う自己概念」が現実的なものとなるプロセスを分析するアプローチを提示した。

次に中田氏が、Deweyの社会構成主義の概念を中心に、言語学習における内発的動機を長期的な視点で捉えるアプローチを紹介した。内発的動機の発達を自律性の発達と関連させて研究するアプローチとして、教育文脈の中で状況に埋め込まれた動機を捉える質的な研究例を紹介した。また、内発的動機には表面的なレベルと習慣

的な学習につながる核の部分が存在するという仮説を提示した。さらに、Deweyの民主主義の概念が、動機づけ研究に新たな光を与えるとする。つまり、学習者の動機は単独では存在しないことを指摘し、教師自身の教育政策や教育システムにおける学習・教授経験が、教師の教育観にも影響し、ひいては学習者の動機や自律性の発達にも影響を与えることを総合的に見る必要性を論じた。

最後に竹内氏がKellerのARCS動機付けモデルを紹介し、授業構成の分析やコースデザインの分析における汎用性が高く、従来の動機づけ研究が十分に成し得なかった教室場面での「動機づけ方略」の検討を可能にすると指摘した。しかし具体的な動機付けストラテジーについてはそれぞれに異なる教育実践において、教師が自ら見出し、自ら授業の改善につなげるというアクションリサーチ的なアプローチの必要性を強調した。さらにCsikszentmihalyiらの「フロー理論」と「創発的動機づけ」の考え方について、タスク難易度の知覚と能力レベルの知覚から最適な学習の進行を説明しようとするものとし、これらを動機付け研究に応用する可能性を論じた。

我々は、英語教育を通して人の発達に関わっている。その過程で教師と学習者が共に動機づけ合い、共に成長することを可能にするような環境のあり方を今後の動機付け研究は模索すべきであろう。（文責 八島智子）

【シンポジウム 3-3】

メタ認知重視の学習ストラテジー指導

司会 木村 隆 (嵯峨女子大学)
提案者 尾関直子 (明治大学)
中島優子 (獨協大学)
大和隆介 (岐阜大学)
藤岡真由美 (近畿大学)

本シンポジウムは、「JACET学習ストラテジー研究会」の活動の一環として、昨年度全国大会でのシンポジウムに引き続いて企画されたものである。今回は特にメタ認知を重視した学習ストラテジー指導に焦点を絞り、「理論的背景」「指導方法」「指導の実践例」という3つの観点から考察を加えることにした。

第1提案(尾関・中島)では、メタ認知を重視した学習ストラテジー指導の理論的背景について考察した。尾関は、学習ストラテジー指導の究極の目的は自律した学習者を育てることであると、自律した学習者とはメタ認知能力を備えた学習者であることを、Benson(2001)とHolec(1981)に言及しつつ述べた。続いて中島は、先行研究のうちのメタ認知を中心とした指導研究に検討を加え、メタ認知能力を高めることによって、認知ストラテジーや社会的ストラテジーなど、他のストラテジーもうまく使用できるようになると結論づけた。第2提案(大和)では、このような結論を受けて、日常の授業にメタ認知重視の学習ストラテジー指導を組み入れるための基本的枠組みと具体的な方策について検討した。大和は、近

年欧米で開発されてきた主たるストラテジー指導法を比較・検証した上で、メタ認知を重視する授業の構成要素と展開の方法について、Chamot et al. (1999)の「メタ認知モデル」を基に具体的な提案を行った。第3提案(藤岡)では、第1・第2提案で議論された内容を踏まえ、メタ認知を重視したストラテジー指導の実践について、大学のライティング授業を例にとりて検討した。藤岡は、上記の「メタ認知モデル」に基づいたレクチャープランを提示し、ライティングで指導するストラテジーが、リーディング・リスニング・スピーキングなど、他のスキルへも転用できることを示した。（文責 木村 隆）

【シンポジウム 3-4】

日本・韓国・台湾の大学入試センター試験 (英語)の読解部門に関する比較研究

司会者 木下正義 (福岡国際大学)
提案者 高梨庸雄 (京都ノートルダム女子大学)
島谷浩 (熊本大学)
山本廣基 (西南女学院大学)

日本の大学入試センター試験に相当する試験として、韓国では大学修学能力試験(Korea College Scholastic Aptitude Test (CSAT))、台湾には大学入学考試学科能力試験(Joint College Entrance Examination (JCEE))がある。過年度の大学入試センター試験と韓国の修学能力試験の英語読解部門の比較は日本・韓国大学入試問題研究会(1999)や韓国修学能力試験の英語読解問題は果たして妥当なテストなのかに関して樋口(2000)などがある。今回は台湾を加えて、三ヶ国の大学入試センター(英語)の読解部門に絞って、各提案者から発表・提案して頂き、今後の大学入試センター試験(英語)の読解部門の出題内容・質問形式などについて議論をフロアの55名の参加者と交換した。

第一番目の提案者として高梨庸雄先生は「大学入試センター読解問題の分析」について、1) 大問別使用語彙数の変化 2) モニター被験者の内訳 3) 平成12-14年度間の標準化(資料2) 4) 資料2の解釈の解釈 5) 高校側の意見(資料3の前半) 6) 高校側からの要望(資料3後半) 7) トピック指定問題(第3学年) 8) 生徒の反応型などに関してpower pointを使用されて詳細な発表と提案をされた。

第二番目の提案者として山本廣基先生は「日韓台の統一大学入学試験英語読解サブテスト問題形式に関する三ヶ国高校生の反応—JCEEについての言及も含めて—」について1) はじめに、2) 方法読解テストとアンケート調査用紙の作成3) 結果4) 考察などに関して資料に沿って詳細に説明及び提案をされた。

第三番目の提案者として島谷 浩先生は「韓国修学能力英語読解試験英語問題の特徴とその波及効果」について1) 韓国修学能力試験英語問題(CSAT)2) CSAT英語

読解問題の特徴3) CSATの韓国英語教師と学生への影響などに関して詳細な資料に沿って説明・提案された。
(文責 木下 正義)

【シンポジウム 3-5】

「わが国の外国語・英語教育に関する 実態の総合的研究」の分析と提言 〈実態調査委員会企画〉

司会 竹前文夫 (桜美林大学)
報告者 見上 晃 (拓殖大学)
分析・提言者 竹内政雄 (椋山女学園大学)
大谷泰照 (元滋賀県立大学)

実態調査委員会のこれまでの2冊の報告書「大学の学部・学科編」と「外国語・英語教員編」を元に、大学の英語教育が抱える問題点を、次の4項目に絞り、支部より推薦されたお二人に分析・提言を求めた。1) 授業環境、2) 教育内容・技術、3) 授業効果、4) 教員。

当日は、50名を超える参加者があり、分析・提言に耳を傾けた。

竹内氏からは、授業環境については、①クラスサイズの調査研究をJACETの重点課題として研究グループを立ち上げること、文科省を通じて、各大学にクラスサイズの適性を要請するなどの提案がなされた。また、②各教員まかせの授業より、共通教材を使用し、プログラム化された授業のほうが学生の満足度にバラツキが少ないことが指摘された。教材に関しては、文学的な教材の減少が調査結果に見られたことに関連して、学生はミステリー、SF、紀行文などに関心を持っている。読解・解読ではなく、実践的コミュニケーションとしてのリーディングをもっと取り入れたらどうであろうかと提言された。

教育内容・技術に関しては、時間切れで、十分ご意見が聞かれなかったが、ハンドアウトによれば、英語教育の目的に関しては、英語教育の守備範囲を教科内だけで考えずに、他教科との連携も必要であることが指摘された。

大谷氏は、授業効果に関しては、英語と日本語の言語的距離に触れて、学習に困難を伴うのだから、TOEFLの比較をしてもあまり生産的でないことを強調された。またクラスサイズと教育効果が比例しているのは明確であり、その点でも、国の文教予算の面からも日本は教育後進国であると指摘された。さらに、教員に関しては、教員を責任ある専門職として養成することの重要性を指摘された。
(文責 竹前文夫)

【基調講演 3】

English as an International Language: An Indian Perspective

講演者 Gargesh, Ravinder (Delhi University)
紹介 岡 秀夫(東京大学)

English as an International language functions for some common socio-economic and political bonds across the globe. It has spread out from the 'inner' circle into the 'outer' and 'expanding' circle countries (to use Kachru's terminology). In the process it has become a complex form of language of wider communication. In the context of multilingual outer circle countries like India, this has created new challenges in terms of setting up of educational goals and ELT pedagogy. In post-independence India English language can be said to have three major social roles: **a**) as an 'associate official language' of the union, i.e., as a pan-Indian link language which not only integrates the country administratively and economically but also functions as a language of social mobility and economic advancement, **b**) as an international language, i.e., as a second language which enables educated population to interact across national boundaries with the English speaking world, and **c**) as a modernizing factor for our regional languages and society. Since most Indians use English primarily amongst themselves and it is also taught by Indians to Indians, it has acquired wide variation and has evolved a creative side. The variant variety has been given the identity marker of 'Indian English' whereas its creativity can be seen in writers ranging from Raja Rao in the 1930's to Geeta Mehta and Jhumpa Lahiri etc. in the present time. In the manifested bilingualism English language can be seen to perform an 'auxiliary', 'complementary' or 'equative' function. This complex situation requires an over-all educational policy where English has to be re-defined vis-a-vis its role in relation to other Indian languages. This has led to a number of unresolved problems. First, whether the RP or a variety we call standard Indian English be described for pedagogical purposes. Second, in order to exploit creative contexts the multilingual Indian ethos needs to be translated into classroom interactions as well as into the teaching materials without sacrificing the international role for the Indian user. Third, the interactive 'problem based' teaching methods need to be introduced where a 'text' withers away leaving the learner with the ability of using English in newer contexts. Fourth, a new professionalism/teacher training needs to be inducted which is suited to the new materials and methods. Finally, reliable integrated tests need to be devised which can test not only the over-all linguistic competence of a learner but also the operational capacity to control distinct situations. The unresolved problems are

being focused upon in this paper not because they are a critique of the present system but for making ELT more functional and fruitful.

References:

- Baumgardner, R. J. (1996). *South Asian English: Structure, Use and Users*. Delhi: Oxford University Press.
- Brutt-Griffler, J. (2002). *World English: A Study of its Development*. Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Kachru, B. B. (1986). *The Alchemy of English: The Spread, Functions and Models of Non-native Englishes*. Oxford: Pergamon Institute of English.
- (文責 Gargesh, Ravinder)

【特別招待講演 4】

To Be a Native Speaker Means Not to Be a Non Native Speaker

講演者 Davies, Alan (Emeritus Professor and Honorary Fellow, University of Edinburgh)

紹介 中野美知子(早稲田大学)

The native speaker can be described by six characteristics:

1. childhood acquisition
2. intuitions of own idiolect
3. intuitions about the standard language
4. discourse and pragmatic control
5. creative capacity
6. interpreting and translating

The paper considers whether a second language (L2) learner can become a native speaker and argue that the only real distinction is in terms of Characteristic 1 childhood acquisition. When childhood acquisition is itself problematised, it turns out that what it means is control over Characteristics 2 to 6. In other words, if a non-native speaker (NNS) can achieve Characteristics 2 to 6, then it seems possible for a NNS to become a native speaker (NS). However, this must be possible for only a few, those Birdsong terms 'exceptional learners' who gain access to NS control through the standard language. The paper notes the role of the standard language in our definition of the native speaker: what learners seek from NSs is their grasp of Characteristic 3, that is their knowledge of the standard language. In the same way, all attempts to give newly emerging lects of English (for example World Englishes) status in their own speech communities rely on recognition by the local speech community not by outsiders that the new lect is a standard language in its own right. This institutional definition of NS means having control of the standard language: which standard language is a matter for the speech community to decide.

Reference:

- Davies, Alan. (2003). *The Native Speaker: Myth and Reality*. Clevedon: Multilingual Matters.
- (文責 Davies, Alan)

【招待講演 5-1】

人間学としての英語教育 — 30余年の実践をふり返る —

講演者 玉城康雄(沖縄国際大学特任教授)

司会 鈴木千鶴子(長崎純心大学)

講師から演題をお聞かせいただいた時は、昨今の学会では遠ざかっていたようなタイトルに魅かれるものがあったが、ややもすると一般的過ぎる乃至は抽象的なものに受け取られやすく、タイトなプログラムの中で多くの聴衆を集めることが難しいのではないかと懸念もされた。ところが、思いのほか若い学会員を含め熱心な参加者に約50名お集まりいただき、それだけでも盛会であったといえよう。しかも、実際のご講演の内容は、講師の個人的文化・社会的背景に基づき、当に世界に一つだけの、またあの時だけの特別なものであった。また殊に、講師が長年携わってこられた教員養成のための英語科教育法の授業運営で実際に考案され、用いられた道具・方法の数々を提示され、極めて具体的なものであった、さらに講師の個性と貴重なご経験が加わり、時間内にきっちりフィナーレに至った時には一同感動を覚えた。

その感動の中身は、次の2点に纏められよう。

- 1) 司会者がかねがね、講師の大学が教員採用試験合格率において好成績をあげてきている要因は何かを探りたいと思っていたが、その秘密が分かった喜び。その答えは、教師の学生に向上して欲しいと思う情熱と、信頼関係。
- 2) 特に、講師は学習者中心の教授方法(Student Centered)を早くから実践しておられるが、Student Centeredの本来の意味が分かった喜び。その答えは、教師が中心となる周到な準備が必須であるということ。

講師が使用されているテキスト『英語教育人間学の展開』の著者であられる松畑熙一先生にご出席いただく幸運にも恵まれ、司会にとって忘れがたい講演であった。

(文責 鈴木千鶴子)

【招待講演 5-2】

Another Nongrammatical Account of Controller Shift

講演者 Kim, Kyunghwan (ALAK, Kyonggi University)

司会 山本廣基(西南女学院大学)

In the framework of Autolexical Grammar, control constructions are analyzed as structural mismatches between

syntax and semantics, which are autonomous modular components generated simultaneously. An object control sentence such as *John persuaded Mary to leave* is syntactically monoclausal with an NP and an *to*-infinitive VP as the complements of *persuade*. However, in semantics the sentence is bipositional with the ditransitive operator *persuade* combining with the proposition [R leave] to become a transitive predicate which in turn combines with the argument *Mary* to become an intransitive predicate which finally combines with the argument *John* to become a fully saturated proposition. The argument of *leave*, R, corresponds to the unexpressed subject of the infinitive VP. It is the reflexive whose reference is determined by the closest c-commanding argument in the semantic structure. A similar analysis is given for a subject control sentence like *John promised Mary to leave*, and an explication is provided for why the matrix subject *John* is construed as the unexpressed subject of *to leave*. The later part of the lecture provides a nongrammatical account of controller shift phenomena in which the controller is changed to the other argument as in *John promised Mary to be allowed to leave*. It is argued that in addition to the responsibility relation which verbs such as *ask*, *persuade* and *promise* presuppose, another crucial factor that triggers controller shift is the potential beneficial relation these verbs and the VP complement such as *to be allowed to entail*.

(文責 Kim Kyunghwan)

【全体シンポジウム】

English as an 'International Language': Educational Goals and Standards

Gill, Saran Kaur (Universiti Kebangsaan Malaysia)

Gargesh, Ravinder (University of Delhi)

Davies, Alan (Emeritus Professor and

Honorary Fellow, University of Edinburgh)

Chair: Yano, Yasutaka (Waseda University)

The spread of English to the world and the resulting diversification of the language have brought the issue of how to reconcile the opposing forces of international intelligibility and local identity whose norms are increasingly endonormative. At the same time, globalization of economy and our life itself has forced us to use English with international intelligibility, which is called EIL (English as an International Language) or ELF (English as a Lingua Franca). The symposium took up the difficult issues of the English language standard(s) and how to apply the concept to the pedagogical context.

First, Prof. Alan Davies analyzed English proficiency tests such as TOEFL and IELTS and argued that they test

the test-takers' proficiency of native-speaker standard English, not varieties of local Englishes although they are used internationally. We need corpora of local English varieties to codify them before we make proficiency tests of EIL, a core English of all varieties. Then Prof. Saran Kaur Gill referred to the Malaysian experience of dilemma over EIL standard vs. local standard with Malaysian identity, which takes place in the Malaysian workplace. After almost 20 years of Malayization of instruction medium in schools, the country modified the policy and started to use English again. Third, Prof. Ravinder Gargesh introduced the status quo of the English education in Delhi' and an innovative step taken to improve the situation. In India, Indian English is taught by the Indian speakers of Indian English for intranational communication.

The panelists were from the Inner Circle and the Outer Circle and offered interesting points of discussion such as characterization of standard EIL, core English, model to teach, international intelligibility and local variety, native-nonnative divide, English and Anglo-American culture, and such, but they were rather remote for the Japanese ELT professionals. As was expected, therefore, the floor did not respond actively and the symposium was not successful due to the moderator's poor presiding.

As the chair who failed in a lively session, I'd like to propose the following for the next annual convention.

1. To choose the panelists from the Japanese colleagues who have sufficient knowledge, experience, and something provocative to say on the convention theme.
2. To choose panelists of opinions opposed to each other.
3. To choose the moderator who is powerful enough to control the panelists and the floor by 'manipulating' the discussion by eliciting remarks, cutting in the person speaking and stop him/her if necessary, and leading the discussion.
4. To use Japanese language so that we can have active participation of the audience.

(文責 矢野安剛)

【2005年度大会の予告】 JACET 44th Convention

日程：2005年9月8日～10日

会場：玉川大学（東京都町田市）

大会テーマ：英語教育の到達目標—その基準を求めて

Exploring the Evolving Goals of English Education

第43回全国大会で学ぶべき英語そのものに焦点を当てたことを受け、第44回全国大会ではその到達目標を探ることが狙いである。そもそも「英語が使える日本人」とは、どの程度英語が使えることを念頭に入れているのか。道案内ができる、道が聞ける、海外旅行で買い物ができる、英語のニュースや映画が理解できる、ビジネス

交渉ができる、海外の大学の英語による授業が受けられる、英語で論文が読める・書ける等々、ざっと挙げただけでもこのようなタスクに必要とされる英語力には大きなばらつきがある。あるいはTOEIC, TOEFL, 英検のような習熟度テストで目標を設定するのだろうか。その場合、どのテストが適切で、どのレベルを狙うのか、どのレベルで何ができるのか。小学校、中学、高校、大学のそれぞれの到達目標は誰がどのように定め、また連携を図るのか。その目標達成にむけてどう指導するのか。入試はどうするのか。つきない疑問について議論を交わし、理解を深めたい。

The primary aim of the 44th annual convention is to explore the goals of English education. Our previous convention focused on the target language, English, so this convention moves the focus from the language to the language learner

When we talk about "Japanese who can use English," what level of use do we have in mind? Are we talking about those who can give directions, shop overseas, understand news or movies without subtitles, deal with business negotiations, participate in lectures at universities abroad, or read and write a thesis? Each of this variety of tasks requires a different level of English proficiency.

Or do we want to define our goals in terms of such standard proficiency tests as TOEFL, TOEIC, or the STEP tests? If this is the case, do we know which test is the most appropriate, where we should set the standard, what level we should aim for, or what we can achieve at each level? Who will determine the goals at each level of education: elementary school, junior high school, high school, and university? Likewise, how will these goals be determined and coordinated? Further, how do we lead our students to achieve the goals that have been set for each level? In the meantime, what do we do with the entrance examinations?

It is our aim to have constructive discussions on these endless questions, to deepen our understanding of the problems, and to begin to think about solutions.

基調講演者:

Professor David Charles Nunan
Chair Professor of Applied Linguistics, and Director,
The English Centre, University of Hong Kong
Dean, Graduate School of Education,
Newport Asia Pacific University (トムソンラーニング後援)

Professor Michael Stuart Byram
Professor of Education, University of Durham
2002-03 Member of Council of Europe team to produce a
Language Education Policy Profile for Hungary
2002- Member of the Academy of Learned Societies for the
Social Sciences (AcSS)

【大会記録】

1. 大会参加者数

会員610人、非会員(一般)46人、非会員(学生)52人
計708人
他に、賛助会員展示業者 48社

2. 大会発表実数

研究発表59、実践報告27、事例研究5、ワークショップ2、シンポジウム15、私の授業3、ポスターセッション5、賛助会員発表5、基調講演3、招待講演9、特別招待講演2、特別報告1、全体シンポジウム1

3. 大会発表者辞退者【大会プログラム(7月発行)以後の辞退者】(敬称略)

9月4日

研究発表 取消 土平泰子(茨城大学)
特別報告 欠席 田嶋ティナ宏子(白百合女子大)

9月5日

シンポジウム3-6 取消
大場浩正(上越教育大学)、中野美知子(早稲田大学)、
山川健一(安田女子大学)、木村真治(関西学院大学)、
杉野直樹(立命館大学)、清水裕子(立命館大学)

4. 原稿提出予定者の内、1人からは期限までに提出がなかったため掲載できませんでした。

編集後記

本大会特集号には、執筆者として約40名の先生方にご協力をいただいて完成しました。今回はメールでの提出ということもあり、原稿の締切日を10月上旬と余裕を持った設定にしたためか、殆どの方に提出期限までに入稿していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

編集 浅岡千利世 (獨協大学)
川口格昭 (東海大学)
久村 研 (田園調布学園大学短大部)

2004年11月29日発行

発行者 大学英語教育学会(JACET)
代表者 田辺洋二
発行所 162-0831 東京都新宿区横寺町55
電話 (03) 3268-9686
FAX (03) 3268-9695
E-mail: jacet@zb3.so-net.ne.jp
http://www.jacet.org/
印刷所 228-0021 座間市緑ヶ丘3-46-12
有限会社 タナカ企画
電話 (046) 251-5775